『東京大学言語学論集』**44** (2022.10) 127-153

ドマリ語の系統関係を動詞の一致標識から考える

北村萌
kitamuramoe0506@gmail.com

キーワード: ドマリ語　インド・ヨーロッパ語族　インド・アーリア語群
記述言語学　歴史言語学

要旨

本研究は、ドマリ語の系統関係を動詞の一致標識から明らかにすることを目的とする。従来、ドマリ語とロマニ語に共通の祖語である祖ロマニ語が立てられることは自明のこととして扱われてきた。しかし近年、ドマリ語とロマニ語の類似点は、両言語が属するインド・アーリア語の中央語群や、新インド・アーリア語 (NIA) の一般的特徴であり、かつて両言語を娘言語とする祖ロマニ語が存在していたことを結論付ける十分な言語学的証拠はないということが Matras (2012) によって主張されている。また、ドマリ語の南部方言と北部方言の分岐が早期に生じたものであるということが Herin (2020) によって指摘されているが、具体的な分岐の時期については未だ考察されていない。

本研究では、比較言語学の手法を用いて、ドマリ語の北部方言と南部方言の動詞の一致標識から、これらが分岐する以前の初期ドマリ語 (Early Domari) の一致標識を再建し、ロマニ語と比較する。結果として、ドマリ語の北部方言と南部方言は動詞のパラダイムに生じたほとんどの改新を共有しており、両方言は北西のインド・アーリア語やイラン語群の言語との接触の最終段階まで一つの言語として存在していたということと、ロマニ語とドマリ語にも共有の改新が見られ、それらが他のインド・アーリア語には見られない、二言語のみに特有の改新であることを確認し、ロマニ語とドマリ語には、両言語を娘言語とする祖ロマニ語が立てられることを主張する。

1. 導入

本研究の目的は、ドマリ語の系統関係を動詞の一致標識から明らかにすることである。ドマリ語とロマニ語は、移動を伴う生活様式や、伝統的な職業などの文化が一致することから、かつて単一の言語であったという系統関係が自明のこととして扱われてきた。しかし近年、ドマリ語とロマニ語の類似点は、両言語が属するインド・アーリア語の中央語群、あるいは新インド・アーリア語 (NIA) 全体に共通する特徴であり、かつて両言語を娘言語とする祖ロマニ語が存在したことを結論付ける十分な言語学的証拠はないということが

Matras (2012) によって指摘されている。Matras (2012: 20) によると、

> “Both Domari and Romani are Indo-Aryan diaspora languages that lack any obvious affiliation to any particular present-day ‘sister-language’ in the Indian subcontinent. There are also ethnographic similarities between the two speaker populations. [...]. The languages share a linguistic legacy as a result of the fact that they both belong to the Indo-Aryan family of languages. They also share features that distinguish them from other New Indo-Aryan languages as a result of permanent bilingualism and the influence of various contact languages.”

さらに、両言語の音韻的側面、形態的側面、語彙を比較した後、Matras (2012: 27) は以下のように結論付けている。

> “There is, in other words, no evidence that Domari and Romani ever constituted a single language, at any period in their development; but there is on the other hand plenty of evidence that they underwent shared developments as a result of sharing the same geo-linguistic environments during successive periods.”

また、Herin (2020: 490) は、ドマリ語の北部方言と南部方言について、両者の違いは大きく、分岐は早期に生じたものであると述べているが、具体的な分岐時期の考察には至っていない。

> “The main isogloss separating these two groups is the maintenance of a two-way gender system. Southern dialects have maintained the gender distinction, whereas it has mostly disappeared in the north. [...]. These are sufficiently different to allow us to posit an early split.”

本研究は、ドマリ語北部方言と南部方言の動詞の一致標識から、両方言が分岐する以前の初期ドマリ語の一致標識を再建し、それをロマニ語の動詞の一致標識と比較することによって、以下のことを主張する。一つ目は、ドマリ語の北部方言と南部方言は動詞のパラダイムに生じたほとんどの改新を共有しており、両方言は北西のインド・アーリア語やイラン語群の言語との接触の最終段階まで一つの言語として存在していた可能性が高いということである。二つ目は、ロマニ語とドマリ語にも改新の共有が見られ、それらが他のインド・アーリア語には見られない、二言語のみに特有の改新であり、ロマニ語とドマリ語

には、両言語を娘言語とする祖ロマニ語が立てられるということである。

以下、第二節においてドマリ語の概要を述べ、ドマリ語の動詞の一致標識の形式や機能を記述する。その後第三節において、本研究で使用する Masica (1991) のインド・アーリア語の一致標識の分析について説明する。第四節では、Masica (1991) の分析方法に従って、ドマリ語南部方言のうちパレスチナ方言と、北部方言のうちアレッポ方言の一致標識を整理した後、南部方言と北部方言が分岐する以前の初期ドマリ語 (Early Domari) の一致標識を再建する。さらに、第五節において、ロマニ語の一致標識についても同じく Masica (1991) の分析方法に従って整理し、初期ドマリ語や、他のインド・アーリア語との比較検討を行い、ロマニ語とドマリ語の二言語のみに特有の共有改新について考察する。

2. 背景

2. 1. ドマリ語とは

ドマリ語はインド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派インド・アーリア語群に属する言語で、話者は中東を中心に散住しているドム人であり、そのほとんどがアラビア語とのバイリンガルである。シリア、レバノンなどの北部方言と、パレスチナ、ヨルダンなどの南部方言に分けられる。ドマリ語は厳しい消滅危機状態にあり (EGIDS 6b-9)、エルサレム方言はその中でも特に危機的な状況にある。本稿におけるエルサレム方言の例文には、エルサレム生まれエルサレム育ち 67 歳の男性 KS 氏から 2019 年 1 月–2020 年 5 月にアラビア語を介して得た調査結果を用いる。

2. 2. 歴史言語学的背景

インド・アーリア語の歴史は古期 (Old Indo-Aryan, OIA)、中期 (Middle Indo-Aryan, MIA)、新期 (New Indo-Aryan, NIA) の三つのステージに分けられる。これらは、Masica (1991) に基づき以下の表 1 のように説明できる。

Turner (1926) に基づき、ドマリ語の歴史的背景として以下のことが推定される。

---

[1] NIA の下位分類については様々な説がある。Cardona (2003: 18) によると、

> "[...] it is reasonable to say that there are eastern, northwestern, southwestern, and midlands groups. On the other hand, the precise manner in which a family tree is to be drawn up as well as the exact affiliation of particular languages — such as Maithili, Magahi and Bhojpuri — are issues which have not been fully settled since the pioneering work of Beams, Hoernle and Grierson."

Turner 以外の説については、Masica (1991: 446–463) を参照。

表1: インド・アーリア語の３つのステージ

	時期	言語
OIA	1500BC-600BC	Vedic Sanskrit　Classical Sanskrit
MIA	600BC-1000AD	Aśokan Prākrits　Pāli　Niya Prakrit　Ardhamāgadhī
		Later Inscriptional Prakrit　Māgadhī　Śaurasenī
		Mahārāshtrī　Sinhala Prakrit　Apabhraṁśa　Eḷu
NIA	1000AD-現代	以下 Turner の分類による主な NIA[1]
		中央語群: Rajasthani　Hindi　Central Pahari
		Nepali　Bihari
		南西語群: Gujarati　Marathi　Sinhalese
		北西語群: Kashmiri　Western Pahari　Lahnda
		Punjabi　Sindhi
		東部語群: Assamese　Bengali　Oriya

1. OIA から MIA 頃までに生じた音韻変化については、ラージャスターニー語、ヒンディー語、中央、東パハーリー語、ビハール諸語などの中央語群と以下の改新を共有しているため、この時期にはインド中原に暮らしていたと推定される。

   r̥ > i, u;　y- > ʤ-;　kṣ > k(h);　sm > mh;　tv, dv, tm > pp;

   -m- > -ṽ-/V_V

2. MIA から NIA の間に生じた音韻変化に関してはスィンディー語、ラフンダー語、カシミーリー語、パンジャービー語などの北西語群と以下の改新を共有しているため、この時期にはインド亜大陸北西部に移動していたと推定される。

   ñc > nʤ;　ṇṭ(h), nt > nd;　r の音位転換

3. その後さらに北西に進み、イラン語群の言語が話されている地域を経て、中東に移動した

2. 3. ドマリ語の動詞のパラダイム

以下の表 2, 3 は、ドマリ語エルサレム方言の動詞のパラダイムである。

1SG の -om/oːm、2SG の -or/oːr については、閉音節においては短母音が、開音節においては長母音が見られる。他動詞節に明示的な目的語名詞句が存在しない場合、他動詞は

表2: 未完了のパラダイム

	sg.	pl.
1	kar-am	kar-an
2	kar-eːk	kar-as
3	kar-ar	kar-ad

表3: 完了のパラダイム

	sg.	pl.
1	kar-d-om/oːm	kar-d-eːn
2	kar-d-or/oːr	kar-d-eːs
3 M	kar-d-a	kar-d-e
3 F	kar-d-i	kar-d-e

動作主の一致標識の後に、人称代名詞接辞によって直接目的語を標示する。この人称代名詞接辞は以下の表 4 のようである。

表4: 人称代名詞接辞

	sg.	pl.
1	-m	-man
2	-r	-ran
3	-s	-san

次の例文は、未完了の動詞の例である。(1) a. は自動詞文、b. は明示的な目的語名詞句を持つ他動詞文、c. は明示的な目的語名詞句を持たず、目的語標示に人称代名詞接辞が用いられている他動詞文の例である。

(1) a. ʃ-ar-i boːl.
speak-3.SG-PRS a lot
‘(S)he speaks a lot.’

b. qol-ar-i kaːby-a.
open-3.SG-PRS door-OBL
‘(S)he opens the door.’

c. lah-am-r-i kull diːs.
see-1.SG-2.SG.OBL-PRS every day
‘I see you every day.’

完了の他動詞が直接目的語を人称代名詞接辞で標示するとき、1SG、1PL、2SG、2PL の動作主は、完了の自動詞の唯一項や、完了の他動詞が被動者を表す明示的な直接目的語名詞句を持つ場合の動作主と同じ一致標識で標示される。

次の例文は、1SG、2SG が主語である完了の動詞の例である。(2) a. は明示的な目的語名詞句が存在する他動詞文、b. と c. は明示的な目的語名詞句が存在せず目的語が人称代名詞接辞によって標示される他動詞文である。

(2) a. nan-d-om samak-i ɑɔ̃oti.
bring-PFV-1.SG fish-OBL today
'I brought fish today.'

b. lah-d-oːm-ir xoɔ̃oti.
see-PFV-1.SG-2.SG.OBL yesterday
'I saw you yesterday.'

c. nan-d-oːr-is.
bring-PFV-2.SG-3.SG.OBL
'You brought it.'

しかし、3SG と 3PL は、明示的な目的語名詞句の有無によって異なる一致標識を用いる。まず、3SG について説明する。3SG では、完了の他動詞節に明示的な目的語名詞句が無い場合、動作主の標示には、性による区別の無い -os/oːs という形式を用いる。

以下の例文は 3SG が主語である完了の動詞の文である。(3) a. と b. は明示的な目的語名詞句を持つ完了の動詞の例であり、c. は、明示的な目的語名詞句を持たず、直接目的語を人称代名詞接辞によって標示している完了の動詞の例である。

(3) a. kar-d-a mansaf.
make-PFV-3.SG.M mansaf
'He made mansaf (traditional Arab dish).'

b. tir-d-i saːl ama-ke.
put-PFV-3.SG.F rice I-BEN
'She served me rice.'

c. ɑ̃an-d-oːs-im?
know-PFV-3.SG-1.SG.OBL
'Did (s)he know me?'

同様の、完了の他動詞の 3SG 主語において二種類の一致標識が使い分けられるという現象は、ドマリ語の北部方言においても見られる。以下の例文は Herin (2012: 29) による北部方言のうちのアレッポ方言の記述である。(4) a. は直接目的語を人称代名詞接辞で標示しない完了の他動詞の例、b. は直接目的語を人称代名詞接語で標示する完了の他動詞の例である。

(4) a. mčə-rd-ã.
kiss-PFV-3SG
'(S)he kissed.'

b. mčə-rd-oːs-əs.
kiss-PFV-3SG-3SG.OBL
'(S)he kissed him/her.'

またエルサレム方言は、3PL 主語の一致標示についても、直接目的語を人称代名詞接辞で標示する場合にのみ見られる -ed という形式を持つ。以下の例文は、(5) a. が完了の自動詞の場合、b. が完了の他動詞が直接目的語を人称代名詞接辞で標示する場合の例である[2]。

(5) a. kamk-id-e baladiːyeː-ma.
work-PFV-3PL city hall-LOC
'They worked in the city hall.'

b. lah-d-ed-im.
see-PFV-3PL.NOM-1SG.OBL
'They saw me.'

一方北部方言では、自動詞であるか他動詞であるかや、明示的な直接目的語の有無に関わらず、完了の動詞の 3PL 主語の一致標識は常に-eːnd という形式を取る。次の例は、Herin (2012: 29) のアレッポ方言の記述である。(6) a. は 3PL 主語の完了の自動詞文、b. は 3PL 主語の完了の他動詞が直接目的語を人称代名詞接辞で標示する場合の例である。

(6) a. nangə-rd-eːnd.
enter-PFV-3.PL
'They entered.'

[2] (5) a. の-id- は、完了相 -d- の異形態で、語幹末が破裂音である場合に生じる。

b. maːr-d-eːnd-əs
kill-PFV-3PL.NOM-3SG.OBL
‘They killed him.’

以上より、エルサレム方言において、完了の他動詞が直接目的語を人称代名詞接辞によって標示する場合の一致標識は以下の表 5 のようになる。

表5: 完了の一致標識 (目的語を人称代名詞接辞で標示する場合)

	sg.	pl.
1	-oːm	-eːn
2	-oːr	-eːs
3	-oːs	-ed

表 5 のうち、1SG、2SG、3SG の一致標識を見ると、それぞれ人称代名詞接辞の -m、-r、-s と子音が一致しており、音韻形式から完了の一致標識と人称代名詞接辞が関係していることが推察できる。

3. Masica (1991) の分析

Masica (1991) は､NIA の人称一致標識は primary personal endings (PC-I) と secondary personal endings (PC-II) から成ると述べている。PC-I はサンスクリットの直接法現在能動の一致標識に起源を持つものであり、語幹に直接後続する。PC-II は、インド・アーリア語において過去分詞が過去時制の動詞の語幹として用いられるようになったという再合成の過程で生じた一致標識で、様々なアスペクトやテンスに後続する。多くの場合、一部の一致標識に形容詞の曲用との形式の類似が見られる。カシミーリー語、スィンディー語など一部の北西のインド・アーリア語では人称代名詞接語と音韻形式が一致している。また、分詞をもとに成立した形容詞的な一致標識、adjectival endings (AC) を持つ言語もある。AC は PC-II と同じく二次的に生じた形式であるが、性と数による一致を見せ、厳密な意味では人称一致標識ではないため、PC-II とは区別されている。インド・アーリア語群の諸言語の一致標識を表にしたものが、図 1, 2 (Masica 1991: 263-264) である。

4. 南部方言と北方方言の比較と Early Domari の再建

4. 1. Masica (1991) に倣ったドマリ語の一致標識の分析

Masica (1991) の分析に倣って、ドマリ語南部方言のエルサレム方言と、北部方言のアレッポ方言の一致標識を PC-I、PC-II に整理すると、以下の表 6, 7 のようになる。

表6: ドマリ語エルサレム方言 一致標識

	PC-I	PC-IIa	PC-IIb
1SG	-am	-oːm	-oːm
2SG	-eːk	-oːr	-oːr
3SG	-ar	-a/-i	-oːs
1PL	-an	-eːn	-eːn
2PL	-as	-eːs	-eːs
3PL	-ad/-and	-e	-ed

表7: ドマリ語アレッポ方言 一致標識

	PC-I	PC-IIa	PC-IIb
1SG	-əm	-oːm	-oːm
2SG	-aː	-oːr	-oːr
3SG	-ər	-ã	-oːs
1PL	-ən	-eːn	-eːn
2PL	-əs	-eːs	-eːs
3PL	-ənd	-eːnd	-eːnd

PC-I は、主に OIA の一致標識由来で、未完了動詞に用いられるものである。また、ドマリ語は PC-II の体系を 2 セット持っており、それぞれ PC-IIa と PC-IIb とする。PC-IIa は名詞/形容詞型の一致標識との混合が見られ、完了の自動詞や、完了の他動詞が直接目的語を人称代名詞接辞で標示する場合の動作主標示に用いられるもの、PC-IIb は一部に人称代名詞接辞由来の一致標識が見られ、完了の他動詞が直接目的語を人称代名詞接辞で標示する場合の動作主標示に用いられるものである。アレッポ方言の記述は Herin (2012) に基づく。

本節では、これらの表 6、7 をもとに北部方言と南部方言が分岐する以前の初期ドマリ語 (Early Domari) の再建を試みる。

4. 2. primary personal endings (PC-I) の再建

まず、primary personal endings (PC-I) について考察する。エルサレム方言とアレッポ方言の PC-I のパラダイムの音韻形式は、ほとんど一致している。一致標識の初めに現れる母音に違いがあるが、これは、アレッポ方言の母音体系がアラビア語シリア方言の影響

を受け中舌化したという音対応に基づいている[3]。従って、PC-I の再建にはエルサレム方言の母音 -a- を採用する。

Masica (1991: 260) によると、PC-I は OIA の一致標識に起源を持つ。サンスクリットの１類動詞の直接法現在能動の一致標識は表 8 のようである。

表8: サンスクリット直接法現在能動 (１類動詞)

	bhṛ- “担う”
1SG	bhar-ā-mi
2SG	bhar-a-si
3SG	bhar-a-ti
1PL	bhar-ā-mas
2PL	bhar-a-tha
3PL	bhar-a-nti

表 8 と表 6 のドマリ語エルサレム方言の PC-I を比較すると、3SG の -ar、3PL の -ad/-and はそれぞれサンスクリットの一致標識の 3SG の -a-ti、3PL の -a-nti に由来すると考えられ、3SG には t > r, 3PL には nt > nd の音変化が確認できる。この音変化は Turner (1926) による指摘に一致している。

āgataḥ > eːra ‘came’　　gataḥ > gara ‘went’　　dantaḥ > dand ‘tooth’

エルサレム方言の 3PL には話者による揺れ -ad/-and が存在するが、アレッポ方言の形式や、サンスクリットの一致標識の形式を考慮すると、-and がより古い形式であり、-ad は -and > *-ãd > -ad と語中の鼻音が消失した新しい形式であると推定することができる。

サンスクリットの一致標識に由来していると考え難いのは、1SG の -am、2SG の -eːk, -eː、1PL の -an、2PL の -as である。1SG の -am は、一見サンスクリットの形式がその

[3] Herin (2012: 6) “As far as short vowels are concerned, one finds a great deal of variability and a strong tendency to centralization towards [ə] is observed, especially in rapid speech. This parallels what usually happens in sedentary Northern Levantine Arabic dialects in which phonemic contrast between the three inherited short vowels /a/, /i/, and /u/ tends to be reduced to /a/ and /ə/ (or /ə and /u/).”

まま保持されているようであるが、これには音対応の問題がある。Turner (1926) は、ドマリ語の母音間の -m- には -m- > -v- の摩擦音化が生じており、1SG の -am の起源はサンスクリットの -ā-mi ではなく何らかの代名詞であると説明している。

dhūmaḥ > *dhūvaḥ > dif ‘tobacco’　　jāmātra > *ʤavtro > ʤatro ‘son-in-law’

1PL の-an について、Matras (2012) は、MIA の 1PL の斜格代名詞 ṇe に由来していると分析している。Pischel (1957) より、MIA の斜格代名詞は以下の表 9 のようである。この説が正しいとすると、1SG の -am も MIA の斜格代名詞 1SG の me に由来すると推定できる。

表9: MIA (Ardhamāgadhī など) 斜格代名詞
(Pischel 1957: 296-303, §415-423)

	MIA 斜格代名詞
1SG	me
2SG	te
3SG	se
1PL	ṇe
2PL	bhe
3PL	se

エルサレム方言の 2SG の -eːk については、Matras (2012) は、最近の改新であると分析しており、その起源については 2 つの説を提案している。一つ目は、ダルド語群に見られる 2SG の -kh に由来するという説で、二つ目は、ドマリ語に存在する述部標識 -eːk の用法が拡張したものであるという説である。

述部標識の -eːk とは、名詞、形容詞、副詞、前置詞句など様々な要素に接続し、コピュラ文の述部を標示する標識である。また、以下の (7) c. のように完了の動詞語幹と同形式である過去分詞に接続することもある。

(7)　a. aha　　qraːr-eːk.
　　This.M Bedouin-PRED.M.SG
　　‘This is a Bedouin man.’

b. aha　　kaɖʒa　　till-eːk.
This.M non-Dom man old-PRED.M.SG
‘This non-Dom man is old.’

c. maːm-oːm　　ʕiːʃ-r-eːk　　ʕammaːn-a-ma.
uncle-1SG.POSS live-PTCP-PRED.M.SG Amman-OBL.F-LOC
‘My uncle lives in Amman.’

2SG の一致標識が述部標識 -eːk に由来すると考える説においては、(7) c. に見られるような過去分詞に接続して現在の状態を表す用法が、未完了の 2SG の一致標識に拡張されたと考えることができる。このことから、本稿では、2SG の一致標識は述部標識の -eːk に由来するという説を支持する。

アレッポ方言の 2SG の -aː の起源は明らかでなく、エルサレム方言の -eːk という形式と、アレッポ方言の -aː という形式のどちらが古い形式かという問題については、今後の課題とする。

また、2PL の -as について、Matras (2012: 249) は、2SG からの拡張であると説明している。しかし、二人称において敬意を表す 2PL が 2SG に拡張する例は通言語的に珍しくないが、逆の例は少なく、この説は支持し難い。また、Bloch (1932) は、エルサレム方言の 2PL に含まれる -s- はサンスクリットの 2PL の活用語尾の -th- に直接由来すると説明し、-th- > -s- という音対応を想定していた。しかし、実際にはサンスクリットの -th- はドマリ語では -r- に対応しており、-th- > -s- という音対応は見られないため、この説も支持し難い。あるいは、サンスクリットの一致標識ではなく、MIA の斜格代名詞の 3SG の se (表 9) に由来しており、それが 2PL に拡張したという可能性もあるが、2PL の -as の形式の起源についてはさらなる検討が必要である。

以上のことから、初期ドマリ語の PC-I の体系は以下の表 10 のように再建できる。

4. 3. secondary personal endings a. (PC-IIa) の再建

次に、secondary personal endings a. (PC-IIa) について考察する。ドマリ語エルサレム方言の名詞と形容詞は男性形、女性形、語末子音形の 3 種類に分類され、男性形は -a、女性形は -i の接辞が後続する。また、複数形には文法性の対立が無く、全ての名詞、形容詞に接辞 -e が後続する (表 11, 12)。ドマリ語エルサレム方言では、この名詞/形容詞の性と数を標示する接辞が動詞のパラダイムにも組み込まれており、完了の自動詞の三人称の唯一項や、完了の他動詞が明示的な目的語名詞句を持つ場合の三人称の動作主を標示するた

表8: サンスクリット直接法現在能動 (１類動詞)

	bhṛ- “担う”
1SG	bhar-ā-mi
2SG	bhar-a-si
3SG	bhar-a-ti
1PL	bhar-ā-mas
2PL	bhar-a-tha
3PL	bhar-a-nti

表9: MIA 斜格代名詞 (Pischel 1957: 296-303, §415-423)

	MIA 斜格代名詞
1SG	me
2SG	te
3SG	se
1PL	ṇe
2PL	bhe
3PL	se

表10: 初期ドマリ語 PC-I の再建形

	初期ドマリ語 PC-I
1SG	-am
2SG	-eːk/-aː
3SG	*-a-ti > -ar
1PL	-an
2PL	-as
3PL	*-a-nti > -and

表11: エルサレム方言の名詞/形容詞 男性形と女性形

男性形	女性形	複数形
qraːr-a ‘Bedouin man’	qraːr-i ‘Bedouin woman’	qraːr-e ‘Bedouin men’
ʃoːn-a ‘non-Dom boy’	ʃoːn-i ‘non-Dom girl’	ʃoːn-e ‘non-Dom children’
zaːr-a ‘Dom boy’		zaːr-e ‘Dom boys’
	laːʃ-i ‘Dom girl’	laːʃ-e ‘Dom girls’
mfall-a ‘stupid (男)’	mfall-i ‘stupid (女)’	mfall-e ‘stupid (複)’
ʃtot-a ‘small (男)’	ʃtot-i ‘small (女)’	ʃtot-e ‘small (複)’
aːn-a ‘egg’		aːn-e ‘eggs’
	ʃmaːl-i ‘chicken’	ʃmaːl-e ‘chickens’
snoːt-a ‘dog’		snoːt-e ‘dogs’
	kor-i ‘house’	korj-e ‘houses’

めに用いられる。

ドマリ語アレッポ方言においては、文法性の区別はほとんど消失しており、表 13 に挙げたような人間を表すいくつかの語彙に残るのみである。

しかし、アレッポ方言の PC-IIa の 3SG は、人間を表すいくつかの語彙に残された男性標識 -ã に音韻形式が一致しており、エルサレム方言と同様に、名詞/形容詞型の一致標識

表12: エルサレム方言の名詞/形容詞 語末子音形

語末子音形	複数形
wat ‘stone’ (男)	wat-e ‘stones’
saːl ‘rice’ (男)	ʃmaːl-e ‘chickens’
ʃaːl ‘well’ (男)	ʃaːl-e ‘wells’
wiyar ‘market’ (女)	wiyar-e ‘markets’

表13: アレッポ方言の名詞 語彙化した文法性が残っているもの

男性形	女性形
kaʤʤ-ã ‘non-Dom man’	kaʤʤ-i ‘non-Dom woman’
droːng-ã ‘old man’	droːng-i ‘old woman’

に由来すると考えることができる。複数標示については、Herin (2014) によると、北部方言には -iːn という複数標識が存在するが、この起源は明らかになっておらず、この複数標示は動詞のパラダイムには組み込まれていない。南部方言に見られる -e と北部方言に見られる -iːn のうちどちらが古い複数標識かという問いについては、南部方言の -e がより古い形式であり、初期ドマリ語では -e が用いられていたと考える。これについては二つの根拠が挙げられる。一つ目に、文法性の保持に見られるように、名詞/形容詞の一致体系については、エルサレム方言の方が古い体系を残している。二つ目に、エルサレム方言とアレッポ方言に共通して見られる PC-IIa と PC-IIb の複数の形式、1PL の -eːn、2PL の -eːs、3PL の -ed/-eːnd に共通している母音 -e は、エルサレム方言に見られる複数標識の -e を反映したものであると考えられる。これについては次項で詳しく述べる。また、北部方言の複数標識 -iːn は、アラビア語の男性複数標識 -iːn の借用である可能性が高い。

論文末に引用した図 1, 2 (Masica 1991: 263-264) からも分かるように、名詞/形容詞に類似した一致体系は、ドマリ語が属する中央語群を中心に、AC 型の一致体系としてインド・アーリア語において広く見られる。これは、OIA から MIA にかけて生じた、過去分詞を過去時制の動詞の語幹として再構成した改新に由来しており、この改新はドマリ語でも生じていると推定される。

ドマリ語では、名詞/形容詞型の一致体系は、エルサレム方言においては 3SG と 3PL、

アレッポ方言においては 3SG のみに限られており、PC-IIa のその他の人称には PC-IIb と共通の形式が用いられている。しかし図 1、2 を考慮すると、この名詞/形容詞型の一致体系は、他のインド・アーリア語においては三人称に限らず、AC 型の一致体系として広く見られる。また、3SG には古い形式が残る傾向があることが指摘されている。このことから、この名詞/形容詞型の一致体系は以前には三人称に限らずに存在しており、その後、PC-IIb 体系との混合が生じ、PC-IIa 体系が成立したと考えることができる。従って、初期ドマリ語の PC-IIa は以下の表 14 のように再建できる。1SG、2SG に生じた PC-IIb 型の改新、1PL、2PL、3PL に生じた改新については、次項の PC-IIb の再建の中で考察する。

表14: 初期ドマリ語の PC-IIa の再建

	Masculine	Feminine
1SG	*-a → -oːm	*-i → -oːm
2SG	*-a → -oːr	*-i → -oːr
3SG	-a	-i
1PL	*-e → -eːn	
2PL	*-e → -eːs	
3PL	-e	

4. 4. secondary personal endings b. (PC-IIb) の再建

次に、secondary personal endings b. (PC-IIb) について考察する。ドマリ語の PC-IIb は、エルサレム方言についてもアレッポ方言についても、人称代名詞接辞と関係していることが音韻形式の類似から推察できる[4]。具体的には、エルサレム方言とアレッポ方言の PC-IIb に共通の形式である 1SG の -oːm、2SG の -oːr、3SG の -oːs の音韻形式は、表 4 に挙げた人称代名詞接辞 -m、-r、-s と子音が一致している。母音の -oː- が子音の前に挿入されるのは、例文 (8) に見られるように、人称代名詞接辞が主格の名詞に接続して所有を表す場合と同じである。

(8) a. keːfa daːy-oːr?
how mother-2SG.POSS

[4] 代名詞の一致標識への文法化は、通言語的に観察される現象である (Haig 2018)。

‘How is your mother?.’

b. aha botr-oːs baːr-im-ki.
This son-3SG.POSS brother-1SG.POSS-ABL
‘This is my nephew.’

2.3 で述べた通り、このような人称代名詞接辞に由来する動詞の一致標識は、北西のインド・アーリア語に見られる特徴である。また、イラン語群との類似も指摘されている (Emaneau 1965: 135–155)。

一方、複数形を見てみると、人称代名詞接辞とは異なる音韻形式を持っており、エルサレム方言とアレッポ方言に共通の形式である 1PL -eːn、2PL -eːs、そしてエルサレム方言の 3PL の -ed、アレッポ方言の 3PL の -eːnd は PC-I の 1PL の -an、2PL の -as、3PL の -and とそれぞれ子音が一致している。

前項の考察で述べた通り、名詞/形容詞型の一致体系は他のインド・アーリア語において広く見られており、そのほとんどの言語において三人称に限らずパラダイム全体に見られる。従って、人称代名詞接辞由来の PC-IIb の体系が成立する前までは、完了の他動詞においても、1PL、2PL、3PL は名詞/形容詞型の -e という形式を持っていたと考えられる。これが正しいとすると、ドマリ語ではその後、PC-I からの類推によって、-e の形式にそれぞれ、1PL には -an、2PL には -as、3PL には -and が付加され、1PL -e + -an → -eːn、2PL -e + -as → -eːs、3PL -e + -and → -eːnd の新しい一致体系が成立したという説を立てることができる。エルサレム方言の -ed という形式は、-eːnd > *-end > *-ẽd > -ed のように、語中の鼻音が消失した新しい形式であると考えられる。

このように考えると、PC-IIb の単数と複数で母音の対立があることについても説明できる。単数形の一致標識に見られる -o- は、所有の人称代名詞接辞に由来しており、複数形の一致標識に見られる -e- は、AC 型の一致標識 -e をもとに新しい形式が構成されたことに由来する。

以上より、初期ドマリ語の PC-IIb の体系は以下の表 15 のように再建できる。

また、次の表 16 に挙げるように、ドマリ語の人称代名詞接辞は、ペルシア語をはじめとするイラン語類の諸言語の人称代名詞接語と形式や機能が類似しており、言語接触によりこれらの言語から借用された可能性がある。この問題を検討することは、今後の課題とする。

表15: 初期ドマリ語の PC-IIb の再建

	初期ドマリ語 PC-II
1SG	-oːm
2SG	-oːr
3SG	-oːs
1PL	*-e → -eːn
2PL	*-e → -eːs
3PL	*-e → -eːnd

表16: 人称代名詞接語/接辞の形式に見られる類似

	ドマリ語エルサレム方言	現代ペルシア語
1SG	-m	=m
2SG	-r	=t
3SG	-s	=ʃ
1PL	-man	=maːn
2PL	-ran	=raːn
3PL	-san	=ʃaːn

4. 5. まとめ

本節で再建した初期ドマリ語の一致標識は表 17 のようになる。また、本節の考察から、ドマリ語の北部方言と南部方言は動詞の一致標識に生じたほとんどの改新を共有していることが明らかになった。従って、推定される最後の改新であり、北西のインド・アーリア語やイラン諸語との接触によって生じたと考えられる、人称代名詞接辞由来の PC-IIb の成立まで、単一の言語として存在していたと推定することができる。

5. ロマニ語との比較

5. 1. 初期ドマリ語とロマニ語の一致標識のパラダイム

本節では、ロマニ語の一致標識を初期ドマリ語の一致標識と比較する。ロマニ語の一致標識を同じく Masica (1991) の枠組みで整理すると表 18 のようになる。

表17: 初期ドマリ語一致標識

	PC-I (未完了)	PC-IIa (完了の自動詞)	PC-IIb (完了の他動詞)
1SG	-am	*-a/-i → -oːm	-oːm
2SG	-eːk/-aː	*-a/-i → -oːr	-oːr
3SG	*-a-ti > -ar	-a/-i	-oːs
1PL	-an	*-e → -eːn	*-e → -eːn
2PL	-as	*-e → -eːs	*-e → -eːs
3PL	*-a-nti > -and	-e	*-e → -eːnd

表18: ロマニ語一致標識 (Matras 2001: 167–169)

	PC-I (未完了)	PC-IIa (完了の自動詞)	PC-IIb (完了の他動詞)
1SG	-ava	-om/em/im/um	-om/em/im/um
2SG	-esa	-al/an	-al/an
3SG	-ela	-o/i	-as
1PL	-asa	-am	-am
2PL	-ena	-an	-an
3PL	-ena	-e	-e

5. 2. primary personal endings (PC-I) について

まず、primary personal endings (PC-I) について考察する。Matras (2001) はこのロマニ語の未完了動詞のパラダイムについて、2PL の -ena を除いてサンスクリットの直接法現在能動の活用語尾 (表 8) にそのまま由来すると述べている。2PL の -ena については、

3PL の -ena が拡張したものであると分析している。これが正しいとすると、1SG の -ā-mi > -ava には -m- > -v-、3SG の -a-ti > -ela には -t- > -l-、3PL の -a-nti > -ena には -nt- > -n- の音変化が生じたことになる。1SG の -ava に見られる -m- > -v-、3SG の -ela に見られる -t- > -l- は Turner (1926) による音変化の記述に一致している。

-m- > -v-　　komalaḥ > kovlo ‘soft’　　graːmaḥ > gav ‘town’
-t- > -l-　　aːgataḥ > alo ‘came’　　gataḥ > gelo ‘go’

一方、サンスクリットの 3PL の -a-nti に見られる -nt- はロマニ語では多くの語で > -nd- の音変化を生じている。

antaraḥ > andre ‘in’　　dantaḥ > dand ‘tooth’

この 3PL の -a-nti > -ena に見られる -nt- > -n- の音変化について、Turner (1927) は、インド・アーリア語の活用語尾の中では通常の音変化よりも著しい弱化が見られ、ロマニ語の 3PL に見られる -nt- > -n- もその一例であると説明している。Turner (1927) は 1PL の -asa に見られる -ā-mas > -asa についても同様に、インド・アーリア語の活用語尾の中で通常の音変化よりも著しい弱化が見られる一例であると分析している。母音間の -m- にはロマニ語では通常 > -v- の音変化が生じているが、1PL の一致標識では、語中の音変化よりも著しい弱化が生じ、サンスクリットの 1PL の -ā-mas から、> *-aːvas > -as と変化したと考えることができる。

ドマリ語と比べてみると、ドマリ語の 2SG、1PL が OIA の一致標識に起源を遡ることができないのに対し、ロマニ語はほとんどの一致標識が OIA の一致標識に由来していることになる。このように考えた場合、PC-I については、3SG、3PL の一致標識にドマリ語とロマニ語の共有の保持は見られるが、共有の改新は見られない。

5. 3. secondary personal endings a. (PC-IIa) について

次に、secondary personal endings a. (PC-IIa) について考察する。PC-IIa についても、ロマニ語はドマリ語と類似しており、三人称において数、性による名詞/形容詞的な一致が見られる。ロマニ語の PC-IIa の 3SG の -o、-i、3PL の -e はそれぞれ、形容詞に接続して男性、女性、複数を標示する接辞と形式が一致している (Matras 2004: 94)。

名詞/形容詞型の一致体系はインド・アーリア語群全体において広く見られる改新であるものの、これが三人称のみで保持されており、その他の人称では別の体系を用いてい

る言語は、図 1、2 の Masica (1991) の表を見ても存在しない。1SG の -om/em/im/um、2SG の -al/an については、ロマニ語もドマリ語同様に人称代名詞接辞由来の PC-IIb の一致標示を使用しており、この改新は、ドマリ語とロマニ語の系統関係を裏付ける一つの共有の改新であると考えることができる。

5. 4. secondary personal endings b. (PC-IIb) について

次に、secondary personal endings b. (PC-IIb) について考察する。ロマニ語の単数のセット 1SG、2SG、3SG はドマリ語同様、人称代名詞接辞に由来していると考えられる。2SG については、t > r (Domari), l (Romani) の音対応を踏まえると、ロマニ語の -al とドマリ語の -or という対応が見られる。3SG については、ロマニ語の -as とドマリ語の -os という対応が見られる。母音については、ロマニ語の 1SG の -om においてドマリ語の 1SG と共通である -o- が見られることから、-o- が保持された古い母音であると推定できる。

人称代名詞接辞が完了の他動詞において動作主を標示するという体系は、イラン語群と北西のインド・アーリア語に共通の地域特徴として分析されることがある (Emaneau 1965: 135–155)。しかし、これが単数のみに見られるというのは、他のインド・アーリア語には無く、ドマリ語とロマニ語のみに共有されている改新であると考えることができる。

さらに、この人称代名詞接辞を動作主の人称一致標識として用いるという用法は、完了の他動詞が明示的な直接目的語名詞句を持たず、直接目的語を人称代名詞接辞で標示する際にのみ生じることを 3 節にて説明したが、ロマニ語においては、明示的な直接目的語名詞句の有無によらず、次の (9) のように、完了の自動詞は PC-IIa の一致標示を、他動詞は PC-IIb の一致標示を見せる (Matras 2001: 169)。

(9)　a. kar-d-as.
　　do-PFV-3SG
　　‘S/he did.’

　　b. avi-l-o.
　　come-PFV-M
　　‘he came.’

ドマリ語においては、完了の他動詞であっても、明示的な目的語名詞句を持つ場合には PC-IIb の一致標識を用いることはないという差異はあるものの、3SG において他動詞と自動詞の分裂が見られるという点ではロマニ語とドマリ語は一致しており、このような共

通の形態的改新も、ドマリ語とロマニ語の系統関係を裏付ける証拠になると考えられる。その場合、ドマリ語とロマニ語が分岐する以前には、完了の自動詞では PC-IIa 型、完了の他動詞では PC-IIb 型という分裂であったが、ドマリ語において、自動詞の PC-IIa 型の機能が拡張し、完了の他動詞が明示的な目的語名詞句を持ち、直接目的語を人称代名詞接辞で標示しない場合の動作主標示にまで用いられるようになったと推定することができる。

前節における初期ドマリ語の再建の中で、PC-I からの類推によって、1PL -e + -an → -eːn、2PL -e + -as → -eːs、3PL -e + -and → -eːnd の新しい一致体系が成立したという改新を考えたが、この改新はロマニ語では生じていない。ロマニ語では、3PL は PC-IIb についても名詞/形容詞型の一致標識 -e が保持されているが、PC-IIa、PC-IIb 共通の 1PL、2PL の起源は明らかになっていない。2PL の -an について Bloch (1932: 312) は、PC-I に生じた変化と同様に、元は 3PL であったものが 2PL の意味も表すように拡張したものであると説明している。1PL の -am については、プラークリットの 1PL の属格代名詞 mha、amhe (Pischel 1957: 297, §415) に由来する説を挙げているが、いずれも検討が必要である。Matras (2001: 171) は、1PL について、ロマニ語も以前はドマリ語と子音が共通した -an という形式を持っており、2PL の -an は 1PL が拡張したものであると説明しており、その起源は MIA の 1PL の斜格代名詞 ṇe (表 9) に遡ることができると分析している。しかしこの説についても、子音の一致という形式の一部の類似のみではなく、機能や構造にも、起源と考えるに値する十分な類似が見られるのか、さらなる検討が必要である。

5. 5. まとめ

以上により、人称一致標識の形態論について、ロマニ語とドマリ語は完了の自動詞の三人称において名詞/形容詞型の一致標示を保持しており、完了の自動詞の 1SG、2SG、完了の他動詞の 1SG、2SG、3SG においては人称代名詞接辞由来の一致標識を用いるという改新を共有しているということが確認できた。名詞/形容詞型の一致標示は他のインド・アーリア語においても広く見られるが、それが 3SG、3PL のみで保持されており、1SG、2SG では人称代名詞接辞由来の一致標示が見られるという特徴や、完了の 3SG のみにおいて他動詞と自動詞の分裂が見られるという特徴は他のインド・アーリア語では見られず、ドマリ語とロマニ語の系統関係を裏付ける共有の改新である。従って、ドマリ語とロマニ語は、人称代名詞接辞由来の動詞の一致標識を持つ北西のインド・アーリア語やイラン語群の言語との接触があった時期に、単一の言語として存在していた可能性が高く、両言語には、両言語を娘言語とする祖ロマニ語を立てることができると結論づける。

6. 結論

以上の考察により、ドマリ語の一致標識に生じた歴史的変化について、以下のことが分かった。まず、未完了動詞に用いられる PC-I については、3SG、3PL では OIA の一致標識に由来する形式を保持しており、1SG、1PL、2PL は MIA の斜格代名詞に由来する可能性がある。2SG においては述部標識を用いた独自の改新が生じている。

またドマリ語は、PC-IIa において、中央語群を中心に他のインド・アーリア語にも広く見られる名詞/形容詞型の一致標示を 3SG、3PL に保持しているが、PC-IIb を得る以前にはこの名詞/形容詞型の一致標示は他の人称においても用いられていたと考えられる。その後、おそらく北西のインド・アーリア語やイラン諸語との接触の影響で、人称代名詞接語に由来する一致標識が生じ、完了の 1SG、2SG においては名詞/形容詞型の一致標示に代わって用いられるようになった。3SG においては、完了の自動詞や、他動詞が明示的な目的語名詞句を持つ場合の動作主標示には名詞/形容詞型、完了の他動詞が明示的な直接目的語名詞句を持たず、直接目的語を人称代名詞接辞で標示する場合の動作主標示には人称代名詞接辞由来の一致標示が用いられるようになった。1PL、2PL、3PL においては、名詞/形容詞型の一致標識である -e に、OIA の一致標識に由来する PC-I が付加されることにより新たな一致標識が成立し、名詞/形容詞型の一致標示に代わって用いられるようになった。しかしエルサレム方言においては、完了の自動詞の唯一項の 3PL や、明示的な目的語名詞句が存在する他動詞節の動作主の 3PL を標示する場合に限って、名詞/形容詞型の一致標識が保持されている。

ドマリ語アレッポ方言とエルサレム方言は、アレッポ方言において独自に生じた母音の音変化を除き、これらの形態的改新のうちほとんど全てを共有しており、この二方言が北西のインド・アーリア語やイラン語群の言語との接触の中で最後の動詞のパラダイムの改新を終えるまで同一の言語として存在していたことには疑いの余地がない。

また、ロマニ語とドマリ語についても、ドマリ語のアレッポ方言とエルサレム方言間の音対応以上に大きな音変化の差異が見られるものの、名詞/形容詞型の一致標示が 3SG、3PL のみで保持されており、1SG、2SG では人称代名詞接辞由来の一致標識が用いられるようになったという改新や、完了の 3SG において他動詞と自動詞の分裂が生じたという改新は、他のインド・アーリア語では見られず、それぞれにおいて偶然生じたとも考え難い。従って、ロマニ語とドマリ語は、北西のインド・アーリア語やイラン語群の言語との接触があった時期に、同一の言語として存在していた可能性が高く、両言語には、両言

語を娘言語とする祖ロマニ語を立てることができると結論づける。

ドマリ語の北部方言と南部方言の分岐や、ドマリ語とロマニ語の系統関係については、音対応を除き詳細な検討が行われてこなかった。しかし、形態的側面に焦点を当てて共有の改新を検討することによって、系統関係を裏付ける改新を発見することができた。今後、PC-IIb における北西のインド・アーリア語やイラン語群の言語からの言語接触の影響を検討することによって、ドマリ語北部方言と南部方言、そしてドマリ語とロマニ語の分岐時期をさらに詳細に特定することが望まれる。

I = primary personal concord　II (a, b) = secondary personal concord
AC = adjectival concord　AC+ = adjectival concord + pers. increment
{ } = partial adjectival concord　/ = gender contrast (M/F/N)

K.	I	IIa	IIb	AC
1	-i	-s	-m	-u/i
2	-akh	-kh	-th	-u/i
3	-i	-Ø	-n	-u/i
4	-av	{-C'/i}	-Ø	-i/e
5	-iv	-vi	-vi	-i/e
6	-an	{-C'/i}	-kh	-i/e

P.	I	AC
1	-ā˜	-ā/ī
2	-e˜	-ā/ī
3	-e	-ā/ī
4	-īe	-e/īā˜
5	-o	-e/īā˜
6	an	-e/īā˜

Ku.	I	II	AC
	-ū˜	-yū˜	-o/i
	-ai	-ai/ī	-o/i
	-Ø	{-o/i}	-o/i
	[=1]	-ā˜	-ā/i
	-au	-ā	-ā/i
	-an, au	-à/in	-ā/i

N.	I	IIa	IIb	AC
	-ū˜	-u	-e˜	-o/ī
	-es	-as/es	-is	-o/ī
	-os	-a/e	{-o/ī}	-o/ī
	-au˜	-au˜	-au˜	-ā
	-e	-au/yau	-au	-ā
	-ūn	-an/in	-e/in	-ā

L.	I	AC
1	-ā˜	-ā/ī
2	-e˜	-ā/ī
3	-e	-ā/ī
4	-ū˜	-e/iā˜
5	-o	-e/iā˜
6	-in	-e/iā˜

H.	I	AC
	-ū˜	-ā/ī
	-e	-ā/ī
	-e	-ā/ī
	-e˜	-e/ī˜
	-o	-e/ī˜
	-e˜	-e/ī˜

A.	I	IIa	IIb
	-o˜	-o˜	-(i)m
	-ɔ	-i	-i
	-e, y	-Ø/-e	-ɔ
	[= 1]		
	-ā	-ā	-ā
	[= 3]		

S.	Ia	b	II
1	-ā˜	-yā˜	-usi/asi
2	-ī˜	-ē˜	-ē/ia˜
3		-ē	{-ō/ī}
4	-ū˜	-iū˜	-āsī˜/iūsī˜
5	-ō	-yō	-au/iū˜
6	-an	-in	{-ā/iū˜}

Br.	I	AC
	-ao˜	-ō/ī
	-ae	-ō/ī
	-ae	-ō/ī
	-ae˜	-ē/ī˜
	-ao	-ē/ī˜
	-ae˜	-ē/ī˜

Mth.	I	IIa	IIb
	-ī	-hu˜	-i
	-ae˜	-ae˜	-ae˜
	-ae	-aka	-aka
		-Ø/-i	
	[=1]	[=1]	[=1]
	-aha	-aha	-aha
	[=3]	{-anhi	-tha/thi
		-āha-īha}	

WR.	I	II	AC
1	-ū˜	-ū˜	-o/ī
2	-e	-ī	-o/ī
3	-e	-ī	-o/ī
4	-ā˜	-ā˜	-ā/ī
5	-o	-o	-ā/ī
6	[=3]	[=3]	-ā/ī

Aw.	I	II	AC+
	-au˜	-eu˜/iu	-ā/ī
	-ai	-isi̯	-ā/ī
	-ai	isi̯	-ā/ī
	-ī	-en	-ē/ī
	-au	-eu/iu	-ē/ī
	-ai˜	-ini̯	-ē/ī˜

Bhoj.	I	IIa	IIb	IIc
	-ī˜	-ī˜	-ī˜	-ī˜
	-u	-e	-e	-e
	-o	-e	-asi	Ø/i
	[=1]	-ī˜jā˜		-ī˜jā
	-a	-a/-ū		-a/-ū
	-asa	-ansa˜/isa˜		-esa˜/isa˜

Figure 9.1　Concord suffixes used with NIA verbal forms

図1: Masica (1991) Figure 9.1

G.	I.	AC
1	-u˜	-o/ī/u˜
2	-e, y	-o/ī/u˜
3	-e, y	-o/ī/-u˜
4	-īe	-ā/ī/ā˜
5	-o	-ā/ī/ā˜
6	[=3]	-ā/ī/-ā˜

Bu.	I	II	AC+
	-au˜	-au˜	-ō/ī
	-ē	-at, ai	-ō/ī
	-ē	-ai	-ō/ī
	-ē˜	-an, ai˜	-ē/ī˜
	-ō	-au	-ē/ī
	-ē˜	-ai˜	-ē/ī˜

B.	I	IIa	IIb
	-i	-ām	-o
	-(i)f	-if	-i
	-e	-o	-e
	[= 1]		
	-o	-e	-e
	-(e)n	-en	-en [=H2, 3]

Ch.	I	IIa	IIb
1	-au˜	-eu˜	-au˜
2	-as	-es, ē	-ē
3	-ai	-is	-ai, ī
4	-an	-en	-an
5	-an	-eu	-au
6	-ai˜	-in	-ai˜

M.	Ia	b	IIa	IIb	AC+
1	-e˜	-ī˜	-o˜/-e˜	-o˜/e˜	-ā/ī/e˜
2	-as	-īs	-os/es	{-ās/īs/e˜s} +	
3	-e	-ī	-o/e/e˜	{-ā/ī/e˜}	-ā/ī/e˜
4	-ū˜		-ō˜	-ō˜	-e/yā/ī˜
5	-ā˜		-ā˜	-ā˜	-e/yā/ī˜
6	-at	-īt	-āt	{-e/yā/ī˜}	-e/yā/ī˜

O.	I	IIa	IIb	IIc
	-e	-i	-i	-i
	-u	-u	-u	-u
	-e	-ā	-ɔ	-i
	-u˜, e	-u, e	-u˜, ā	-u˜
	-ɔ	-ɔ	-ɔ	-ɔ
	-ɔnti	-e	-e	-ɔnti

Ko.	I	II
1	-ā˜	-ō˜/ī/-e˜
2	-āsi	-osi/ī/-e˜(i)
3	-ā	{-o/ī˜/e˜}
4	-āu˜	-eu˜
5	-āt(h)	-yāth
6	-āt	{-e/yo/ī(˜)}

Si.	I	IIa	IIb
1	-mi	-emi	-emi
2	-hi	-ehi	-ehi
3	-yi	-eya/ī	-ēya/āya
4	-mu	-emu	-emu
5	-hu	-āhu	-āhu
6	-ti	-ōya	-ōya

Figure 9.1 (*cont.*).

図2: Masica (1991) Figure 9.1

参考文献

Emaneau, Murray B. 1965. India and a Linguistic Areas. In: *Language and Linguistic Areas: Essays.* 1980, 126-166. Stanford: Stanford University Press.

Haig, Geoffrey 2018. The grammaticalization of object pronouns: Why differential object indexing is an attractor state. *Linguistics 56 (4)*: 781–818.

Herin, Bruno. 2012. The Domari language of Aleppo (Syria). *Linguistic Discovery 10 (2)*: 1–52.

Herin, Bruno. 2014. The northern dialects of Domari. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft 164*: 407-450.

Herin, Bruno. 2020. Northern Domari. In: Lucas, Christpher, Stefano Manfredi (eds.) *Arabic and Contact-induced Change*, 489-509. Berlin: Language Science Press.

Bloch, Jules. 1932. Le présent du verbe “être” en tsigane. In: *Indian Linguistics 2*, 309-316.

Macalister, Robert Alexander Stewart. 1914. *The language of the Nawar or Zutt: The nomad smiths of Palestine.* Gypsy Lore Society Monographs 3. London: Edinburgh University Press.

Matras, Yaron. 2001. Tense, aspect and modality categories in Romani. *STUF - Language Typology and Universals 54 (2)*: 162-180.

Matras, Yaron. 2004. *Romani: A Linguistic Introduction.* Cambridge: Cambridge University Press.

Matras, Yaron. 2012. *A grammar of Domari.* Berlin: De Gruyter Mouton.

Masica, Colin P. 1991. *The Indo-Aryan Languages.* Cambridge: Cambridge University Press.

Pischel, Richard. 1957. *Comparative Grammar of the Prākrit Languages. Translated from the german by Subhadra Jhā.* Varanasi: Shri Sundarlal Jain.

Turner, Ralph. 1926. The position of Romani in Indo-Aryan. *Journal of the Gypsy Lore Society 3 (5)*: 145-189.

Turner, Ralph. 1927. The phonetic weakness of terminational elements in Indo-Aryan. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland 2*: 227-239.

Considering the Genetic Relationship of Domari by Reconstructing the Indexings of Early Domari

KITAMURA Moe
kitamuramoe0506@gmail.com

Keywords: Domari, Indo-European, Indo-Aryan, descriptive linguistics, historical linguistics

Abstract

This study aims to demonstrate the genetic relationship of the Domari Language by analyzing its indexings. It has been taken for granted that Proto-Romani existed as the parent language of both Domari and Romani. Recently, however, Matras (2012) pointed out that the linguistic similarities of Domari and Romani are assigned to the characteristics of Central Indo-Aryan languages or NIA languages, to which both Domari and Romani belong. Moreover, although Herin (2020) suggests the early dispersion of Northern Domari and Southern Domari, the period of their dispersion remains unclear.

In this study, I reconstruct the indexings of Early Domari, which refers to the latest stage of unity before the dispersion of Northern Domari and Southern Domari, by applying the comparative method to the indexings of Northern Domari and Southern Domari. In addition, I compare the reconstructed indexings with the indexings of Romani. As a result, I show that Northern Domari and Southern Domari share almost all of the innovations that have affected their indexings. This means that they had not yet split when they experienced the latest innovation of indexings under the influence of the North-Western Indo-Aryan languages or the Iranian languages. I also show that Domari and Romani share some innovations that cannot be seen in the other Indo-Aryan languages. Thus, there existed a proto-language, Proto-Romani, which has Domari and Romani as it's daughter languages.

(きたむら・もえ　東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野修士二年)